

## 《童話》と《小説》の間

——新資料・住井すゑ『夜あけ朝あけ』関連草稿から——

安達原 達 晴

### はじめに

『夜あけ朝あけ』<sup>①</sup>は住井すゑによる児童文学のなかでも、代表作の一つとされる。第八回毎日出版文化賞を受賞し、複数の出版社より復刊されている。<sup>②</sup>発表後間もない一九五六年には劇団民芸により映画化され、<sup>③</sup>また演劇化もなされた。

農村に暮らす奥山家の兄妹、長男正司、次男武、長女えつ子、次女さと子は母、祖母と共に互いに助け合う日々を送っていた。ある時、母は農作業中の怪我がもとで破傷風を発症し、急死する。残された兄妹たちは百姓を続け過酷な供出制に対応しつつ、なんとか自活の道を探る。以上が物語の概要である。

住井すゑ・犬田卯の旧邸宅を改修した牛久市住井すゑ文学館が、二〇二一年一月に開館した。東海大学日本文学科は牛久市教育委員会文化芸術課と共に、開館前から旧邸宅に残された膨大な資料群の調査研究・整理にあたっている。<sup>④</sup>この作業は現在も続き、二〇二二年度より科学研究費の助成を受けている。<sup>⑤</sup>二〇二二

年九月二日から四日にかけて行われた調査で、『夜あけ朝あけ』関連の草稿が発見された。<sup>⑥</sup>本稿では発見された草稿中、ひと続きとみられる一二枚を紹介する。さらに、完成作品との比較による現段階での考察を述べたい。

### 一 住井すゑ『夜あけ朝あけ』関連草稿

紹介する草稿は、二百字詰の原稿用紙一二枚である（写真参照）。書き損じ等も含め冒頭五行分が空いている。『橋のない川』草稿にも冒頭が空行となっているものがみられた。作品題目や章題目等を後から加えることを前提とした書き方かもしれない。気になるのは三枚目の上方中央の行間に「1」、六枚目の同位置に「2」とあるのを抹消するように記した「3」、一〇枚目の上方後ろから三行目と四行目の行間に「4」と、数字が認められる点である。物語の内容上の区切りを示すようにもみえる。次に、全文を掲げる。

活字化に際しては、草稿の様子が少しでも伝わるように努め

た。抹消して右隣に記された箇所は（）で示した。また撥音「つ」、拗音「や」の表記は大文字で統一した。「」内は稿者による注記である。

【No. 1】

〔三行空き〕

やわやわ や〔次の文字を書きかけ抹消か〕

やわらかにほおをなでる、アブラナの甘いにおい。そつと唇にしのびよるかすかな、れんげ草のにおい。鬼怒川べりの春の村は、野の花のにおいに明け暮れました。〔ます〕。

その美しい、自然の中で、奥山家は、おか

【No. 2】

あさんを中心として、正司、武、えつ子、さと子、そして、おばあさんの六人が、つ、ましく、暮らしていました。

晩春の或る日、えつ子は、友達と鬼怒川の土堤に寫生に行き、足もとにあつた、たんぼ、の綿帽子を、ふつと、吹くと、鳥の羽よりもかくる「るく」の誤記か、とびました。

「あつ！ すてきだ、えつ子さんは、今年中に新しいきものももらえるよ。」

「どうして。」

【No. 3】

「だつて、綿毛が一ぺんにとんだら、新しいきものがもらえるつてアンデルセンの童話に書いてあつたから」

そういう、恒夫の顔を、えつ子は、本思議（びつく）りして、見つめていました。

〔行間に「1」〕

きーっ、ちゃきちゃき、とん、とん、その日も、おかあさんは、薄暗い仕事場で、田植迄に、一はた上げ様と、はたを織っていました。おかあさんは、結城つむぎの名織手だったのです。

【No. 4】

豊かな暮しではなかつたので、田畑仕事の合間を見ては、はた織にはげんでゐるおかあさんでした。〔いました。〕

侘暁（困つた）時でも、笑顔を見せていましたが、やせた、おかあさんの横顔を、子供たちは、いつも心配して、見ていました。〔この一文、×で抹消〕

えつ子は、はた織の手を休めたおかあさんに、たんぼ、のおはなしをしました。

「い、おはなしね、かあさんも、えつちゃん位の時は、よく、たんぼ、をとばしたもののよ。」

【No. 5】

今でもやつて見たいけぢぢ（ど、）人にみつかつたらきちがいにされてしまうものね。」

「じゃ、おかあさんの代りに、わたしがとばしてみるわ。新しい

まもの（一ぺんにとんだ）ら、おかあさんも、あたらしいきものがもらえるわ。よその人の着物ばかりおつていないで、たまには、おかあさんも、新しい着物をきな（ればい）、じやないの。」

その夜、えつ子は、アンデルゼンの本の中（に）、「アンデルゼンの文字抹消」ルゼンのおじさん、わたしは、鬼怒

#### 【No. 6】

川べりの、たんぼ、です。わたしも、白い綿帽子になつて、新しいきものを、おむかえに行きます。やさしい、おかあさんに差上げるために——。えつ子と書き込んで寝ました。

「行間、「2」の上に「3」

畑の麦もかり取られ、田植じまいの日に、えつ子は、おかあさんのために、たんぼ、を吹（た）の右隣に文字の抹消（き）した。一息でとんだ綿毛を見ながら、おかあさんは

（でも、）いつたい、どなたが下さるのかしら」

#### 【No. 7】

（と）、えつ子（の）抹消の下に「方」書きかけて抹消か（を見て、）かすかに笑いました。

あくる朝、起き様としたとたんに、おかあさんは、床の上に倒れてしま（い）ました。田植の時足に一寸傷（き）ずをしたのがもとで、おそろしい破傷風を起（こ）してしま（つ）たのでした。

（になつていたのでした。）

子供達は、皆力を合せ、おかあさんの看護につくしましたが、容態はますます悪くなるばかりで、夕方近くに、とう／＼病院に行（もとの文字抹消）きました。

正司と武が、おかあさんにつきそつて病院

#### 【No. 8】

に行つた晩、えつ子は夢を見ました。

突然、おかあさんが、帰つて来て、はたの前に坐り、何時もの様にはたを織りはじめました。ところが、ぶつんと糸が切れてしま（い）ました。おかあさんは、溜息をつきながら糸をつなぎましたが、糸が無くなると、今度は自分の髪の毛を抜いて、つなぎ出しました。

えつ子はびっくりして、「おかあさん」と叫びました。

外は、美しい朝になつていました。

#### 【No. 9】

筑波は紫に、鬼怒川の土堤は、みどりに昨日と少しも変わらない景色でした。

えつ子は、ほつとして、こんな美しい朝におかあさんが死ぬはずはないと、自分にいいかせていました。

その、えつ子の小さいのりと、正司、武のあつい看護の甲斐もなく、やさしく、強かつたおかあさんは、その美しい朝、この世を去りました。

お葬式の日、正司が、出来上つたばかりの

【No.10】

経帷子を、おかあさんの上に、かけるのを見て、えつ子は、わつと泣きました。

「ごめんなさい、おかあさん」

とわつと（と泣き）しました。たんぼ、の予言は、あたたたけれど、それが、経帷子だつたとは、

手つだいの人達には、なぜ、えつ子が、狂つた様に泣くのか、わかりませんでした。

〔行間に「4」〕

おかあさんと一緒に植えた稲も大きくなり畑の作物も、だん／＼に花を咲かせはじめました。

【No.11】

わづかな田畑とはいえ、子供ばかりではと村の人々は、危みましたが、正司は、完全に田畑の作物を守りました。

武も、えつ子も、ひまのある限り、田畑に出て、働きました。野菜を市場に出して、足りないお米を買つたり、おかあさんの新盆の用意をしたりしました。

ひゅーん／＼、冷たい西北の風の吹く頃には、お米の供出がはじまります。正司は、大人にまじつて、毎晩、供出の相談に出なければ

【No.12】

ばなりませんでした。武も、おばあさんも、無理だという、供出を、正司は、一番乗りで出しました。それを聞きつけた、新聞社では早速、記者を正司の家へ「え」の上から「へ」むけ、寫真をとつたり、記事を取「もとの文字抹消」つたりしてゆきました。

一日おいた朝、本家の文助おじいさんが、正司たちの記事の出ている新聞をもつて、かけ込んで来た。（まし）た。

よろこんでいるのは、文助おじいさんと、おばあさんだけで、正司も、武も、うれしそ

二 完成作品（第一章）との比較

この一二枚の草稿がいつ頃書かれたのかは不明である。タイトルはないが、『夜あけ朝あけ』完成作品との内容的な近接が著しいため、とりあえずその関連草稿と便宜的に呼ぶ。

草稿の内容は、完成作品の「第一章 山ざる」（以下、第一章）と多く重なる。ただし、複数の点で興味深い相違がみられる。まず、草稿は文体が「です・ます」である。次の指摘と相俟つて、より〈童話〉らしい雰囲気をもたらし一因といえる。内容は、第一章の物語展開と重なりとみてよい。えつ子がたんぼの綿毛吹きによる占いで母に「新しいきもの」が与えられると喜んだものの、母は急死し弔いの経帷子こそ「新しいきもの」であった。この主立った筋書が、草稿には尽くされている。

ただし、分量には大きな違いがある。『夜あけ朝あけ』は全三

章。『住井すゑ作品集』第三卷（一九九九年二月、新潮社）収録の本作全九六頁分のうち、第一章は三七頁分、単純な字数計算で四三六五二字となる。もし二百字詰原稿用紙に換算するなら、約二一八枚である。二百字詰め一二枚の草稿中、第一章の内容に該当するのは約二〇〇〇字の一〇枚（注（8）参照）で、二〇倍以上の差がある。草稿冒頭の「やわらかにほおをなでる」から始まる四行は、第一章の書き出しとほぼ一致する。同様に、第一章の各所に草稿にある表現を確認できる。草稿の筋立ての合間に複数のエピソードやアンデルセン童話を足すと、第一章の姿になるといえる。

さらに重要と考えられるのは、焦点人物が草稿ではえつ子のみといえるのに対し、第一章では複人数登場する点である。これは叙述の分量を増やし、かつ作中世界を複層化する常套手段といえるが、これから述べていく本作のテーマ性とも深く関わる。

いま示した通り、草稿ではえつ子のみが焦点人物であり、第一章に散りばめられた他のエピソードなどがほとんどみられない。したがって、貧しさで余裕のない暮らしのなか母に「新しいきもの」と強く願うえつ子の想いが母の死により皮肉にも叶った形になる、そのような悲愴感が草稿ではより顕著といえる。もちろん、第一章でも草稿と同じく母の出棺時に「狂ったように泣く」（四八三頁）えつ子の悲しみは十分に表現されているだろう。しかし、完成作品のテーマを意識したとき、第一章にはえつ子の母の死の背後に何があるのかという問い掛けとその答えもまた、より鮮明に描かれるようにみえるのである。

住井すゑは夫の犬田卯と共に、戦前より農民文学者として活動している。『夜あけ朝あけ』を一読すれば、農村と都市・農民・労働・貧困といったキーワードが明確に浮かぶ。住井は本作初刊本の「あとがき」で、農民画で知られるフランソワ・ミレーにも触れつつ「はたらいて生きて行くという、その姿の真実さ、美しさ」（五五四頁）を訴える。そして「びんぼうな百姓、奥山正司一家のものがたりは、遠くから、これをながめて書いたのでは」なく、「私は、私のなかに、はたらく正司一家をだいている」（同）と述べる。また、初刊本のカバーに付された吉田甲子太郎による「少年小説の夜あけ」と題した一文には、本作が「日本ではじめての、農村に取材した少年小説である」（五五五頁）と記されている。

ただし、あらかじめ述べておくと、本作に窺える〈農〉の側面に対しては同時代の批判もあった。<sup>(10)</sup>本作のテーマ性自体の評価については、慎重に行う必要があるだろう。あくまでも本稿では、草稿との比較を通じ第一章の表現がどのように形象されているのか検証することを目的とする。

草稿では先ほどの冒頭部に次いで奥山家の簡単な紹介、たんぼの綿毛が登場する写真の場面となる。対して、第一章では奥山家それぞれが「朝の仕事」（四四七頁）に取り組む。えつ子は母を手伝い食事の支度、武は鳥小屋の掃除、正司は「苗床の手入れ」（同）である。苗床の描写や正司の作業は、より詳しい。農作業の様子、母親が内職に結城紬の機織りをするさまも随所に加わる。

また、少なくとも今回の草稿一二枚には奥山家の父（正吉）に關する記述は見当たらないが、第一章では早々に「昭和十九年五月、ガダルカナルで戦死」したと明かされる。背景に戦争を据えることで、終戦後間もない作中の社会状況が明確に規定されるといえる。

草稿で「やせた、おかあさんの横顔」（のち抹消）とのみある母親の労苦も、第一章では色濃く伝わる。例えば正司が「こころ、二年、おかあさんが、ぐんぐん、やせてきているのを」（四六二頁）知っており、「目立ってやせていくおかあさん。どこか、体の調子が悪いのではあるまいか。（改行）もしかしたら、栄養失調というのかもしれない……」（同）と心配する。他にも第一章には奥山家全体の困窮ぶりや労苦が具体的に描かれる。しかし、それだけではない。貧しさというものに対する受け止め方が、複数の視点で提示されると考えられる。

ある夜、豪雨による雨漏りで奥山家は対応にひとしきり追われる。後日、母親は女子中学生の次のような投稿を新聞で目にする。遠足登山の際、記念にと掘り出した山つつじを先生に注意され友だちが捨てていくなか、彼女は再度植えようとしたところを同じく遠足に来ていた見知らぬ男子中学生に助けられた。かける水がないという彼女に、彼は空を見て今夜は雨が降ると告げ、その通りになる。記事のなかで感謝を伝えられた見知らぬ中学生は、正司であった。山つつじを潤した雨が自分の家に大混乱を運んだ雨でもあることを知った母の様子が語られる。

荒れほうだいの家にすむ、貧しい自分たちには、つらい雨だったが、その雨のおかげで、この見知らぬ少女は、正司に感謝してしてくれるのだ。……

よろこびと、かなしみと。

その二つを、じつとかみしめているのだろう、おかあさんは、長いこと、膝をみつめたきりだった。

（四七一頁）

自然災害で露わになる自分たちの貧しさのすぐ隣に、我が子への感謝に対する喜びを見出す。こうした心の機微は、物語の筋立てのみを展開したような草稿にはみられない。草稿に登場しない人物である、みどりの視点から語られた内容にも目を向けたい。みどりは奥山家と交流のある結城紬の図案家、日高三平の娘である。みどりは「一反何万円」の「きもの」を「無造作に買っている人たち」（四七八頁）をみる一方で、奥山家の母のように内職の機織りに勤しむ人々がいる現実をみつめる。

ところが、夕方、村にかえてみると、草ぶきのかたむいたのきから、きーっ、ちゃきちゃき、とんとんと、はたを織る音が、ものがなくひびいてくるのであった。

じつさい、この時ほど、みどりは、いざりばたの音を悲しくきいたことはない。

（四七八頁、傍点は原文のまま）

自身の感じたことを図案家の父に話すのは気が引ける。彼女は「やり場のない、憤りにいたその悲しみ」(四七九頁)から、アンデルセン童話のページの隅に「アンデルセンおじさん。人間の世界にある差別は、いつになったらなくなるのでしょうか。——日本<sup>(1)</sup>のいなかの子。」(四六五頁)と記すのである。

以上、第一章に限っても母を失うに至るえつ子の悲しみという物語の骨格に、複数の社会的なテーマ性を肉付けした本作の形象が明らかとなる。第三章は、このままでは一家の生計が立たないと判断した正司が家を出て東京へ出稼ぎに行き、村人たちが正司の行為を百姓を捨てたと非難する展開となる。本作全体のテーマ性は、既に第一章の時点でかなり準備されているといえるだろう。

### 三 小括

本稿ではその関連草稿との比較を通じて、『夜あけ朝あけ』第一章の形象を考察した。繰り返すが、一つの主要な物語展開の合間に具体的な場面やエピソードを加え、かつ焦点人物を複数化することにより本作の社会的なテーマ性が形成されたと推測される。焦点人物として取り上げた母親、みどり(正司の同級生)がえつ子より年上であり、そのような成熟した視点が導入されていることも補足しておく。端的にいえば、草稿の表現はより〈童話〉であり、第一章のそれはより〈小説〉であるという印象を与えるだろう<sup>(2)</sup>。

草稿を確認した稿者は、骨格となる物語の筋立てと、本作の社

会的なテーマ性を成立させる諸々の要素とが作者住井のなかで分離していた可能性をたいへん興味深く感じる。その可能性は、小説家・住井すゑにおける児童文学という〈方法〉の意味を改めて考える契機になるかもしれないからである。また、本作同様、子どもたちの視点が多く採用され社会的テーマに真正面から挑んだ『橋のない川』の〈方法〉を追究するうえでも、『夜あけ朝あけ』関連草稿の存在意義は大きい。

### 注

- (1) 一九五四年六月に新潮社より〈少年長編小説〉シリーズの第一巻として刊行された、書下ろし作品。
- (2) 一九六五年一月の新潮文庫版刊行後も、一九七二年七月に理論社から、一九八五年四月に埼玉福祉会から刊行。また、『新選生活指導紙芝居全集』の紙芝居(脚色・福島のみどり、画・伊藤悌夫、一九六〇年、教育画劇)もある。
- (3) 監督は若杉光夫、脚色は片岡薫。
- (4) これまでの作業の具体的な内容や成果は、安達原達晴「住井すゑ『橋のない川』草稿に関する報告 現状とその可能性」『近代文学資料研究』第三号、二〇二〇年三月、牛久市住井すゑ文学館図録(二〇二一年一月)などを参照のこと。
- (5) 令和四年度(二〇二二)基盤研究(C)「旧住井すゑ・犬田卯邸宅資料の調査研究に基づく〈文学と社会〉の包括的考察」(研究代表者・安達原達晴)。
- (6) 牛久市住井すゑ文学館による「住井すゑ生誕一二〇年及び牛

久市住井すゑ文学館開館一周年記念 新発見資料特別展示  
『夜あけ朝あけ』（実施は二〇二二年一月一日から二〇二三年一月二二日）中、『夜あけ朝あけ』関連資料の一つとして展示された。

(7) 用紙欄外の左下に「農村と都市をむすぶ」原稿用紙とある。「農村と都市をむすぶ」は全農林労働組合が、一九五一年六月に第一号を発行、現在も継続中の雑誌。同誌の第五巻第五号（通巻四八号、一九五五年五月）の目次に、「牛久沼畔だより」の作者として住井すゑの名がみえる。

(8) 一〇枚目の終わりから一二枚目にかけては、母を失った後に正司を中心とした奥山家の兄弟が百姓を続けるさまが簡単に描かれる。供出の一番乗りを果たした正司を取材しに新聞記者がやって来て以降の展開も含め、本作との共通性がみられる。この点については草稿の残りと併せ、今後検討したい。

(9) 『住井すゑ作品集』は二段組で、一段二六字×二三行。

(10) 例えば、前掲注(2)理論社版の小宮山量平による解説は本作の出版当時、「農村の貧しさを出稼ぎで克服するような物語は、村内の階級対立に目をそらすものだ、という指摘」があったという（引用は一九八八年九月の第二五刷による、またルビは省略した）。また、吉本隆明は映画『夜あけ朝あけ』の合評のなかで、原作者である住井の考え方に触れ、「都会と農村」、また「貧農と中農」を対立的に捉えること自体に對し疑問を呈する（若杉光夫・佐々木基一・吉本隆明「映画合評 抒情的暗さから暗さの本質へ」「夜あけ朝あけ」評、

『新日本文学』一九五六年五月号）。これらの問題については、住井すゑ「作家や文化人の手は白い」（『群像』一九五六年七月号）なども含めて今後考えられるべきだろう。

(11) ちなみに、『橋のない川（第一部・夜あけ朝あけ（新潮現代文学43）（一九七九年四月、新潮社）の小田切秀雄による「解説」は、本作を（児童文学）とみるか否かの議論について少し触れている。

※『夜あけ朝あけ』完成作品第一章のテキスト、また初刊本「あとがき」および初刊本カバーの吉田甲子太郎による一文は、『住井すゑ作品集』第三巻（一九九九年二月、新潮社）による。引用に際しては頁を付した。

※本稿では今日、差別的と捉えられる可能性のある表現をそのまま引用している。文学研究という学術的な意図により、敢えて原文通りとした。

※本稿は科学研究費助成事業「旧住井すゑ・犬田卯邸宅資料の調査研究に基づく〈文学と社会〉の包括的考察」（基盤研究（C）22K00348）の成果の一部である。

（あだちばら・たつはる 本学講師）





瓶ははんに、鬼谷川の土遣は、みいりに、  
 昨日と少しもまうない景色でしれ。  
 こんふは、ほつとくと、こんなまうい朝に  
 ずあさんおれぬはすはないと、自らにい  
 まかせといふた。  
 その、えつ子の小玉はいうと、正司、武  
 のあつた着物の甲斐りなく、やうしく、強か  
 つに、おあさんは、そのまうい朝、二つせ  
 まうた。  
 お着武の日、正司は、あまふんはかりり

（昭和十三年七月一日）

瓶ははんに、鬼谷川の土遣は、みいりに、  
 昨日と少しもまうない景色でしれ。  
 こんふは、ほつとくと、こんなまうい朝に  
 ずあさんおれぬはすはないと、自らにい  
 まかせといふた。  
 その、えつ子の小玉はいうと、正司、武  
 のあつた着物の甲斐りなく、やうしく、強か  
 つに、おあさんは、そのまうい朝、二つせ  
 まうた。  
 お着武の日、正司は、あまふんはかりり

（昭和十三年七月一日）

瓶ははんに、鬼谷川の土遣は、みいりに、  
 昨日と少しもまうない景色でしれ。  
 こんふは、ほつとくと、こんなまうい朝に  
 ずあさんおれぬはすはないと、自らにい  
 まかせといふた。  
 その、えつ子の小玉はいうと、正司、武  
 のあつた着物の甲斐りなく、やうしく、強か  
 つに、おあさんは、そのまうい朝、二つせ  
 まうた。  
 お着武の日、正司は、あまふんはかりり

（昭和十三年七月一日）

瓶ははんに、鬼谷川の土遣は、みいりに、  
 昨日と少しもまうない景色でしれ。  
 こんふは、ほつとくと、こんなまうい朝に  
 ずあさんおれぬはすはないと、自らにい  
 まかせといふた。  
 その、えつ子の小玉はいうと、正司、武  
 のあつた着物の甲斐りなく、やうしく、強か  
 つに、おあさんは、そのまうい朝、二つせ  
 まうた。  
 お着武の日、正司は、あまふんはかりり

（昭和十三年七月一日）